

普段注目していた弟子に  
1.1の秘密鍛錬を  
提案した春麗。

「さあ、ここで両脚をこう、  
左右に広げて……」

精一杯広げられた両脚の間に  
浮き出てくる春麗の股間。  
男の視線は  
その亀裂の中に  
吸い込まれてゆく。



なにかに憑かれたかのように、  
男の指先が  
春麗の秘部に向けられた。

「……………」

一瞬ビクツとした男だったが、  
彼女から  
拒む気配はないと知ると、  
男の手際は  
徐々に大胆になってゆく。

陰裂をスラリとなでて、  
陰唇の上をなぞるように擦り付け、  
穴の中を探查するように  
親指を深く押し付ける。



「…………♡」

男は、今度は舌先を突きつけてきた。薄いパンツ一枚を向こうから感じられるまるで獣のような息付きと、ヌメツとした異物の動き。

股間部の布が、愛液と涎が混ざった液体に濡れてゆく。



服越しに愛撫することに飽きてしまったのだろうか。男は乱暴にズボンの布を引きちぎった。

春麗は半分とるけてる自分のマンコに外の空気が掠れることを感じた。

男の指が彼女の亀裂の中に潜り込んできた。

ゴツゴツした太い指先が、膣の中を奥まで探索するという奇妙な感覚に唇を噛み締めて耐えようとす春麗。



「あっ♡んっ♡  
あっ♡♡♡ あん♡  
んあっ♡」

春麗の性感帯を捕捉した男は  
思いつきり  
手の動きに拍車をかけた。  
すでに  
火照っていた彼女の体は、  
呆れるほど簡単に  
絶頂に達した。

「……………」

プシューッ、  
と大袈裟な水音とともに、  
彼女の女性器は  
盛大に水を吹き出した。



「ま……待って、  
私、今イッたばかりなの……♡」

彼女の哀願の声に

男は聞き耳も持たず、

鋼のように固く勃起した肉塊を

彼女の穴に思いつき突き込んだ。

すでに十分なまで

弛緩されていた彼女の秘所は、

簡単にその巨根を受け入れた。



「んあん♡ あっ♡ おおっ♡ ああん♡」

熱が冷める間もなく  
無理やり引きずり上げられた感覚。

やがて春麗は  
男の逸物が自分の中で  
更に大きく膨らむことを感じた。

「中につー!! 中に出して!!...!!  
あっ! ああっ! おっ、  
おごおおおおっ♡♡♡♡」

力強い精液の奔流が  
子宮の内壁を強く打ち付ける  
感触を味わいながら、  
春麗は獣のような喘ぎ声を漏らし、  
何度も絶頂した。

再び吹き出された潮と、  
結合部の隙間から逆流する精液が  
衣服を濡らした。



任務を完遂した  
男性器が抜けると、  
蓋を失った彼女の女性器は  
腔内に残された精液を  
思いつき押し出した。  
ビクビクと痙攣する下半身。

その余韻を楽しみながら、  
やはり良い弟子を  
選んで良かったと  
思う春麗であった。



눈여겨 보던 지자에게  
1:1 비밀 수련을 제안한 춘리.

「자, 여기서 다리를 양 옆으로 이렇게...」

힘껏 벌려진 다리 사이로  
도드라지는 춘리의 고간.  
남자의 눈길이  
그 균열 사이로 빨려들어갔다.



무엇인가에 홀린 듯이,  
남자의 손끝이 춘리의 비부에 닿았다.

「웃……♡」

잠시 움찔한 남자였지만,  
그녀가 딱히 거부하지 않고 가만히 있자  
손길이 점차 대담해졌다.

음혈을 슬쩍 슬쩍 훑었다가  
음순 위를 이지러질 정도로 덧그렸다가  
구멍을 탐사하듯 엄지로 꾸욱 밀어내기까지.





「히읃」

남자가 이번엔 허를 들격시키었다.  
얇은 바지 한장 너머에서 느껴지는  
짐승과도 같은 숨소리와  
축축한 이물의 움직임.

사타구니 부분의 천이  
애액과 침이 뒤섞여 젖어들었다.

옷 위로 애무하는 것에 싫증이 난 것일까,  
남자가 마지를 거칠게 찢어버렸다.

춘리는 반쯤 녹아버린 보지에  
바깥 공기가 닿는 것을 느꼈다.

남자의 손가락이 그녀의 균열을 파고들었다.

울퉁불퉁한 두꺼운 손가락이  
질의를 이곳저곳을 탐사하는 기묘한 감각을  
아랫입술을 깨물며 버티보는 춘리.



「맛♥응♥맛♥앙♥맛♥」

춘리의 성감대를 확인한 남자가  
손을 세차게 움직였다.

이미 한창 달아오른 그녀의 몸은  
우스울 정도로 간단하게 절정에 달했다.

「~~~~~」

푸췌, 하는 요란한 소리와 함께,  
그녀의 여성기는 성대하게 물줄기를 뿜어냈다.



「자...잠시만, 나 방금 가서.....♥」

춘리의 애원은 이미 들리지 않는다는 듯,  
남자는 강철같이 말기한 육체를  
그녀의 구멍에 힘차게 찢어넣었다.

충분하게 이완된 그녀의 비소는  
간단하게 거근을 받아들였다.



「응앙♥앗♥웃♥앙♥」

열을 식힐 새도 없이  
강제로 다시 끌어올려진 감각.

이윽고 춘리는  
남자의 자지가  
한층 더 부풀어오르는 것을 느꼈다.

「안에!!! 안에 싸줘!!! 앗! 아앗! 웃! 오오오오오옥♥♥♥」

정액 줄기가  
자궁 벽을 거세게 치는 것을 느끼면서,  
춘리는 짐승같은 신음소리를 내며  
몇 번이고 절정했다.

또 다시 뿜어나온 시오후키와  
연결부에서 역류한 정액이  
숫자락을 더럽힌다.



임무를 완수한 남성기가 빠져나가자  
마개를 잃은 그녀의 여성기는  
질에 남은 정액을  
힘차게 밀어냈다.  
움짤움짤 경련하는 하만신.

그 여운을 즐기며,  
제자 하난 잘 뽑았다고 생각하는 춘리였다.

